

〔巻頭言〕

人の理解と援助は生活現場で総合的に

札幌学院大学人文学部 伊藤 則 博

心理学が拡大し、現代社会に浸透するのと同時に増大してきた「心理主義の風潮」は、人間に発生する諸問題を個人の「こころの問題」やせいぜい身近な環境である「家庭や学校、職場の人間関係の問題」に押し込めてしまい、人の持つ生物・生理学的営みやさらには人と地域社会や国家、国際関係や地球規模の環境との関係の問題などから捉えようとする国民の目を逸らすのに役立っているように思われる。

最近の政府主導の「教育再生会議」の設置とその活動内容を見てみると、「学校教育を改革すれば日本の青少年問題がすべて解決する」というような単純な前提があり多くの国民もそれを支持しているようだが、我が国の主要な生活・生育環境である家庭と地域社会の問題、さらには現代日本の文明・文化の状況や社会・経済構造のあり方を問題にしないで、学校教育だけに手を入れてもほとんど効果は期待できないと考えるのは、私だけであろうか？

Bronfenbrennerは、子どもの生活行動や発達を理解し援助を組み立てるためには、子どもの個人内部で起きていることのほかに、親きょうだい・保育者・教師などの外部環境との「直接的相互関係(マイクロシステム)」、そして園・学校、地域社会の人や物との「間接的関係(メソシステム)」、さらに両親の職場、地域社会のネットワーク、兄弟の学校や学級、地域の教育行政機関の活動など子どもが直接参加できない地域社会環境との関係(エクソシステム)、加えて国の文明・文化や経済社会状況との関係や国際的・地球的諸問題との関係(マクロシステム)という4つのシステム構造を、時間の経過(クロノシステム)という次元も入れて考えなければならないと指摘している。

我が国の心理臨床に携わる者もそろそろ相談室やアセスメント・ルームから出て、コミュニティ感覚をもってクライアントの生活現場に参加し、地域で活動している各分野の専門家および非専門家と協力しあい、クライアントの強さとコンピテンスをエンパワメントする活動を行うとともに、家庭や学校、地域社会を改革するような地域援助活動を展開すべきではないか。そうすることによって、心理臨床活動が広く国民のものになるだけでなく、この学問分野のさらなる発展を支えることになると思うのだが。

参 考 文 献

- Bronfenbrenner, U. 磯貝芳郎・福富護共訳 (1996) : 人間発達の生態学—発達心理学への挑戦— 川島書店
- 山本和郎編著 (2001) : 臨床心理学的地域援助の展開—コミュニティ心理学の実践と今日的課題— 培風館